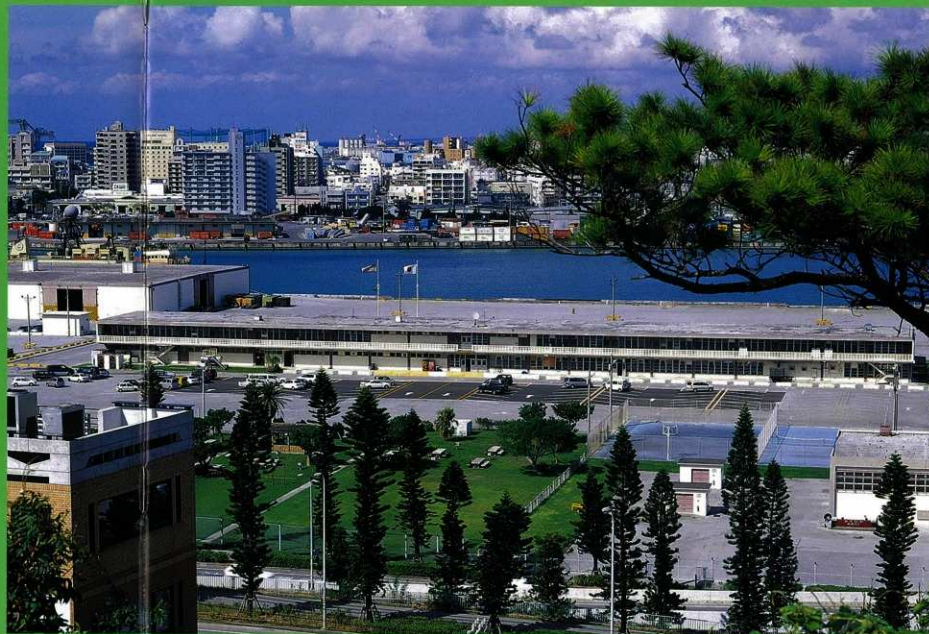


埋蔵文化財発掘調査ニュースNo.13

かきの      はな      むら      あと  
**垣      花      村      跡**



発行／那覇市教育委員会 〒900-8553 沖縄県那覇市樋川2-8-8  
編集／那覇市教育委員会文化財課 電話(098)853-5776  
印刷／(株)東洋企画印刷

2006年3月  
那覇市教育委員会

# 垣花村跡発掘調査ニュース

## (1) はじめに

今回は、平成15・16年度にかけて発掘調査を行った「垣花村跡」の概要について紹介いたします。発掘調査は、那覇防衛施設局の那覇港湾提供施設内管理棟改築工事に伴うもので、那覇市教育委員会が委託を受けて実施しました(第1図)。遺跡が確認されたのは、工事予定地(那覇軍港内)における試掘調査を平成14年度に実施したのがきっかけです。

さて、垣花村は、「古くは真和志間切備間・湖城村で、1672年(尚貞4)に小禄間切垣花村」となったようです(沖縄大百科事典より)。「かつては、木綿織、パナマ帽編みが盛んで、都会的なものと農漁村的なものが混在した姿」であったと伝わります(沖縄タイムス朝刊掲載の思いでのわが町より)。

## (2) 周辺の遺跡分布について

垣花村跡の周辺には第2図に示したように幾つもの遺跡の存在が確認されています。

遺跡の時代ごとに見てみましょう。

まず、一番古い遺跡は旧石器時代の山下町第一洞穴遺跡です(奥武山公園の南西側丘陵の中腹に位置します)。鹿の骨と一緒に、7、8歳ほどの女の子の骨が見つかり「山下洞人」と名付けられています。次に、沖縄新石器時代前・中期(縄文時代後・晩期)および同後期(弥生時代～平安時代)のガジャンピラ丘陵遺跡。土

器や石器の他に貝・骨製品なども出土しています。そして、琉球王府時代の御物城(11ページの写真)、屋良座森ガスク、三重ガスク、硫黄城を含む渡地村跡などが見られます。

また、本調査区と隣接して「住吉遺跡」が確認されています。この両遺跡は別々に発掘調査が実施されましたが、本来は同じ遺跡の広がりと考えられることもできます。今後、那覇軍港内の調査には留意が必要となるでしょう。

## (3) 発掘調査の概要

発掘調査は、約2,000m<sup>2</sup>の範囲で実施されました。遺跡は、上層(第3層)の近代期(19世紀～)と下層(第4層)の近世期(15・16世紀～)の二時期にまたがる「村跡」と考えられます。

まず、上層は、約5cm前後の焼土(第2層)に覆われた状況で確認されており、バックフォアにて第3層の遺構面を検出しました。(第3図)調査の担当者としては、この焼土は、1944(昭和19年)10月10日のいわゆる10・10空襲の痕跡ではないかと考えています。

遺構としては、建物跡(6ページ上の写真)、道路跡、石囲い遺構(6ページ中の写真)、井戸跡(6ページ下の写真)などが検出されています。建物跡は琉球石灰岩などの切石を基礎に建てられたものと木柱を建てた土間立て小屋のようなものが確認されています。

遺物は、沖縄産陶器(8ページ中の写真)が圧倒的に多く出土しており、その他に赤色や灰色の瓦、本土産磁器、中国産磁器、円盤状製品、銭貨(8ページ下、12ページ上の写真)などが得られました。その中で注目される遺物としては、本土産磁器と円盤状製品が挙げられます。本土産磁器は、焼物の底面の裏に産地を示す文字や番号が印字されたものが得られています。これは、先の大戦中に焼物の窯場ごとに付されたものであるようです(資料の鑑定結果より)。これらの資料が本遺跡から得られたことは、戦中における物の流れを示す貴重な成果です。円盤状製品は、これまでいろいろな遺跡でも出土していますが、本遺跡では、直径約50cmの範囲から50個以上もの資料がまとめて検出されました(8ページ上の写真)。あたかも、円盤状製品の集積場所との印象がありました。しかも、丁寧な加工が施されており、製作者の心意気を感じられます。

一方下層は、調査区内の約880m<sup>2</sup>を主体的に調査を実施しました。

調査の成果としては、調査区東側で、拳大の琉球石灰岩を敷き詰めた遺構(7ページ下の写真)と調査区西側の土坑(ピット)が検出されています(7ページ上と中の写真)。

前者は、溜池状を呈する遺構の一部とも考えられましたが、全容が判然としませんでした。その石敷きに伴って、出土した中国産磁器(青

花)から18世紀～19世紀頃の遺構と推測されます(12ページ中の写真)。ただし、この遺構が集落の中でどのような役割を果たしていたかは不明です。後者の土坑(ピット)は、その配置や規模などから柱穴とは考えにくいもので、何らかの作物を栽培した痕跡ではないかと考えられました。

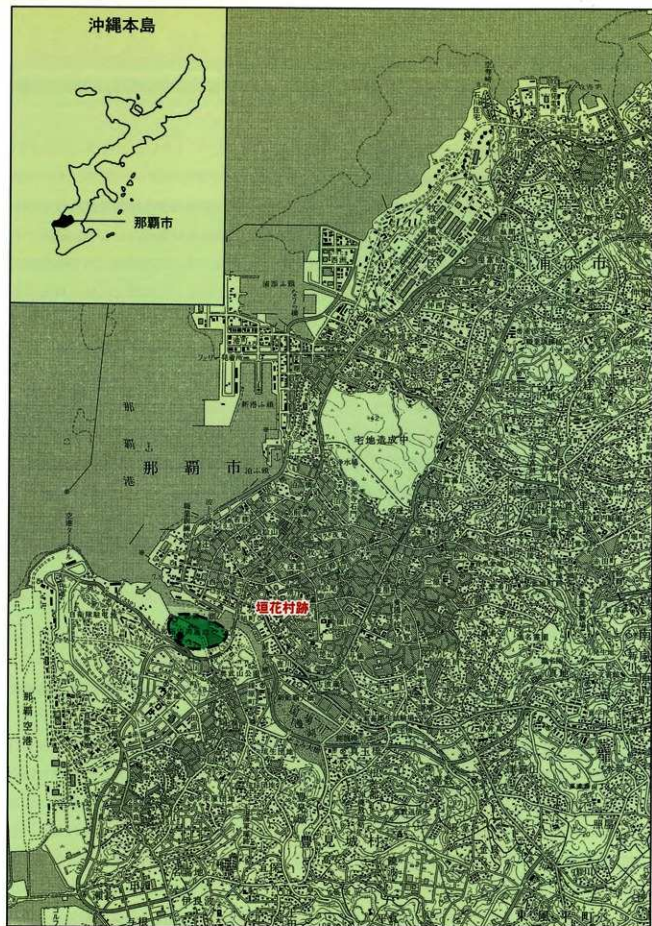
遺物は、上述した、中国産磁器の他に、本土産磁器も多数含まれているようです。なお、本遺跡からは、15世紀～16世紀の中国産青磁なども得られており(12ページ下の写真)、遺跡の成り立ちや周辺遺跡との関連も興味深い資料です。また、一部、沖縄新石器時代に相当すると見られる一時期古い土器片も少量出土しています。このことより、本遺跡の周辺には、違う時代の遺跡が混在している様子がうかがえます。

## (4) おわりに

以上、垣花村跡の概要について紹介しました。今回は、集落の一端を発掘調査したに過ぎません。

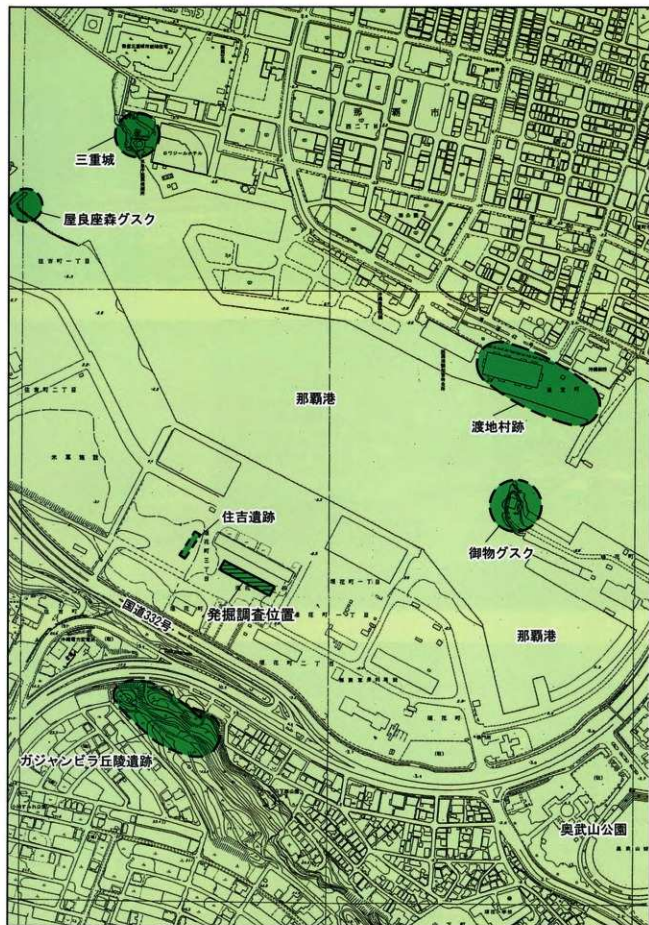
今回の調査区がどのような集落の姿をしていたのか、また、他の地域とのかかわりがどのようなものだったのか、さらには、集落が成立した背景など様々な検討課題が挙げられます。それには、発掘調査で得られた多種多様な情報をいかに的確に分析するかが問われます。これからの資料整理作業に期待が高まります。





第1図 那覇市の位置と垣花村跡の位置

(S ≒ 1/50,000)



第2図 発掘調査の位置と周辺の遺跡(概略図)

(S ≒ 1/6,000)



遺跡遠景(南から)



遺跡近景(北西から)



遺跡全景(南東から)

検出された遺構①  
建物跡(南から)  
写真左側に張り出しが見られる。



検出された遺構②  
石囲い遺構(西から)

検出された遺構③  
井戸跡(北から)



**検出された遺構④**  
 ビット群および溝状遺構(北から)  
 直径15cm~60cmのビットと  
 幅40cm~100cmの溝が確認された。



**検出された遺構⑤**  
 ビット群および溝状遺構(西から)  
 遺構の完備作業と測量作業を行う。



**検出された遺構⑥**  
 磯敷遺構(南東から)  
 準大の石灰岩礫が一面に敷き詰められている。

**出土した遺物①**  
 円盤状製品(南から)  
 様々な素材で作製された  
 円盤状製品が集中して出土。



**出土した遺物②**  
 沖縄産陶器の皿  
 ビット内よりほぼ完全な形で出土。

**出土した遺物③**  
 銭貨  
 近代銭で遺跡の年代を  
 考える手掛かりとなる。





測量作業の状況  
レベルにて図面作成の準備を行う。



図面作成作業の状況①  
層序の地積状況を断面図に  
して作成する。

図面作成作業の状況②  
平板実測にて道跡の平面図  
を作成する。



発掘調査の作業状況  
ピットを掘り下げる。



室内作業の状況  
出土した遺物を洗浄する。

発掘調査メンバー  
平成16年7月撮影





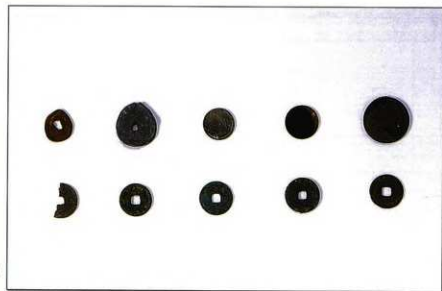
あまのつぐ  
御物城の遠景  
(北から)



あまのつぐ  
御物城の石門  
(北から)



あまのつぐ  
御物城の周辺に  
散在する輸入陶磁器



出土遺物①  
銭貨(近世～近代)  
第3層より出土

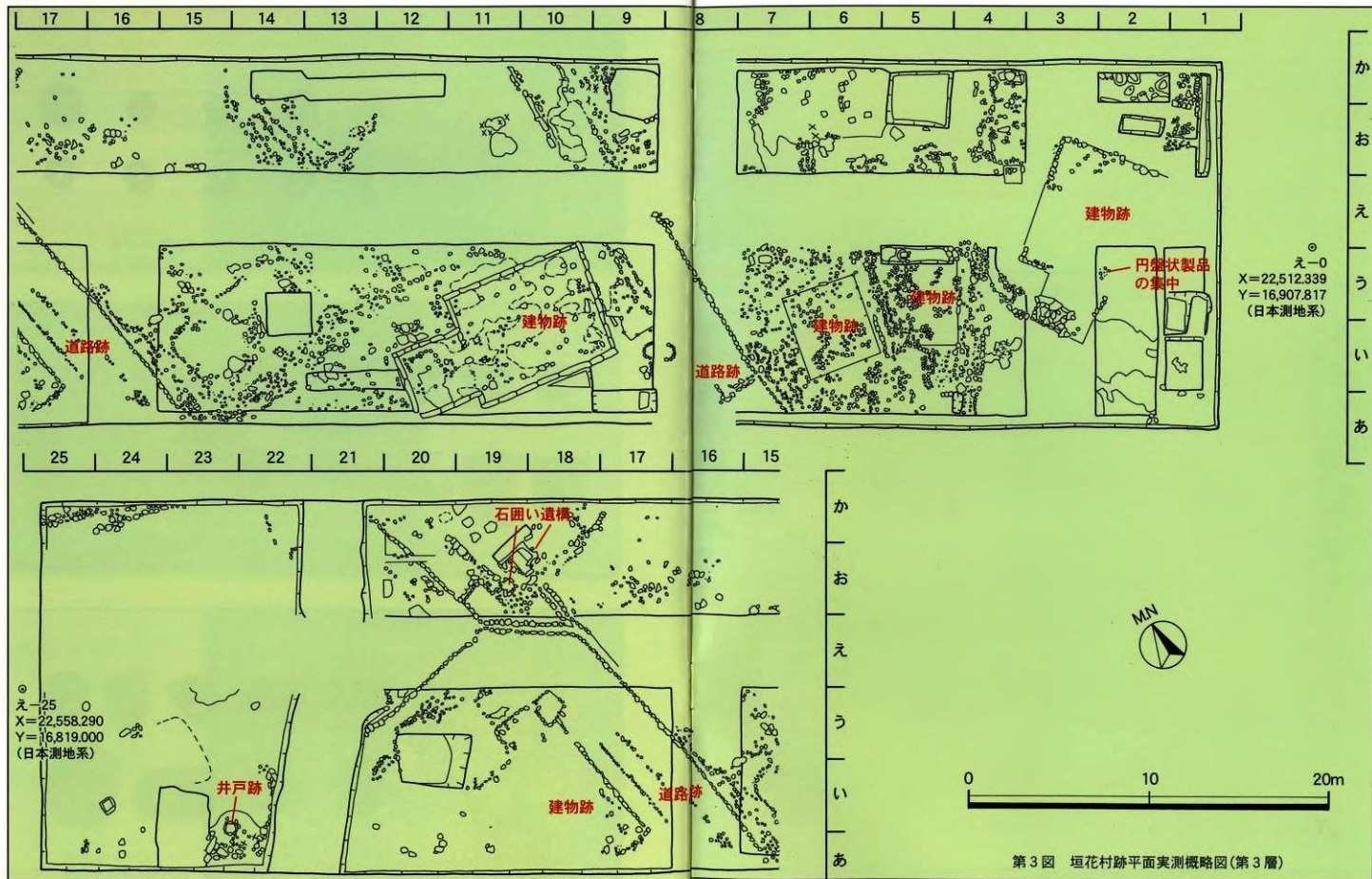


出土遺物②  
中国産磁器(青花:18c～19c)  
第4層より出土



出土遺物③  
中国産磁器(青磁:15c～16c)  
第4層より出土





か  
お  
え  
う  
い  
あ

か  
お  
え  
う  
い  
あ

第3図 垣花村跡平面実測概略図(第3層)